



「最期の願い」

受賞者：大石 有美香さん

「ハナは自分で姉貴に預けに行きたい」

その言葉を患者から聴いたのは、働き始めて3年が経ったある日のことだった。

肺がん終末期と診断されたその方は、緩和治療として医療用麻薬を持続投与するほどの呼吸困難感があった。いつも訪室するとじつとりと冷や汗をかき、苦痛からか看護師に苛立たしさをぶつけることも入院日数を重ねるたび増えていた。そんな時、急に「ハナは俺じゃないとダメだ。俺が姉貴に預けに行きたい」とぼつりと弱々しい声で私に訴えた。

「ハナ」とは、彼と一緒に暮らす1匹の大切な家族、柴犬のハナちゃんだ。

最期にそれだけは絶対に自分でやりたいと彼の意思はとても強かった。その姿に私はなんとかその願いを叶えてあげたい、担当として最期を一緒に全うする責任があると考え、すぐに多職種に協力を仰いだ。また、彼の家族にも協力を依頼し、快く協力を得ることができた。

医療用麻薬は一時的に内服へと変更し、万が一

に備え蘇生セットも準備した。そしてその方は家族の車に乗り、医師および看護師が引率し約1

時間程度の外出をした。外出中は軽度の呼吸困難感や冷汗の症状が出現することもあったが、自宅に到着すると車椅子に移乗し、入院中では見ることのできなかった優しい穏やかな笑顔で愛犬のハナちゃんと触れ合っていた。また「これからは姉貴がお前を見てくれる。わかったか?」と優しく声をかけ、ハナちゃんも話が理解できているかのように見つめ返し、穏やかに姉に預けられた。

外出は無事に終わり、その方は「もう思い残すことはないよ。ありがとう」と優しい笑顔をされた。

そして1週間後、亡くなられた。

看護師として働く中で、患者にどのような関わったら良いのか、何がその方にとって良いのか悩むことがたくさんある。しかし、その方に寄り添い続け、一緒に何ができるかを考え続けていくことで見つけられることも必ずある。これからもそれを大切に看護をしていきたい。